

價値の體系（一）

文化價値と創造者價値

左右田喜一郎

余が本論に於て解明を試みんとする問題は二つある。而して恐くは是凡ての社會的文化哲學の研究に従ふものゝ根本問題を形成すべきであらう。即ち一は文化生活の種々の範圍に互りて其の一が他に對して如何なる關係に立つやを究むるにある。Mannに從つて之を概言すれば凡ての社會生活は其の基調たる經濟生活の反影に過ぎずと解すべきか。Stammier (*Wirtschaft und Recht*, 2. A. 1916) に從つて經濟生活は凡ての社會生活の實質にして其の形式をなすものは法律生活なりと解すべきか。又は多くの經濟學者に從つて經濟生活はヨリ高き社會生活たる倫理生活の準備階段に立つものなりと解すべきか。總じて凡ての社會生活の一が他に對し、上下前後、并列何れの關係に立つべきやを究むるにある。而して余が既に種々の機會に於て叙述を試みた様に社會生活の凡ての範圍は夫々に其の係はるべき文化價値（例へば經濟生活に對しては經濟的文化價値、法律生活に對しては法律的文化價値の

如く)によつて始めて認識論的に「可能」となり、換言すれば其の限定せられたる範圍内に於ける文化價值に係はらしめられて始めて其の社會生活は吾等に認識せらるゝものと解釋せられ、且其の社會生活究極の歸趣たるべきものを此の特定の文化價值に見出し得べきものとすれば、逆言すれば凡ての社會生活は此の特定の文化價值を實現する一個の過程なりと解釋し得べきものとすれば、上記諸社會生活間の關係を究むるの基礎は言ふまでもなく諸文化價值其自身の *Kausalitat* を如何に決定すべきやの根本問題解明の裡にあることを示すものである。即ち例へば經濟的文化價值と法律的文化價值、法律的文化價值と宗教的、藝術的、技術的等の諸文化價值の間に如何なる *Kausalitat* を認むべきやの根本問題に没入して初めて其の問題解明の根基が與へらるべきである。

余の問題の第二は此の如くして其の相互の關係を明にせられたる諸文化價值は凡そ價值と稱せられ得べきものゝ全體系の中に在つて如何なる位置を占むべきや即ち文化價值の價值體系中に於ける位置如何と云ふことである。従つて本問は凡そ價值と稱せらるゝものにして文化價值に對立して其の獨立の位置を保ち得べきものありや、其の性質如何、而して其の文化價值に對する關係如何と云ふことに推し

移り得べきものである。此くして更に進むで諸文化價值又は其の基礎としての文化價值一般と之より獨立に之と對立して一個特定の位置を保持し得べき諸價值即ち吾等の考へ得べき凡ゆる價値の基本として如何なる價値に思ひ到るべきやといふ根本問題に到達すべきである。要するに全價値の體系につきて若干の考察を要求する問題となる。

余が本論に於て此の二問題の解明につきて一個の意見をあり能ふべきものなりと主張するは、取りも直ほさず延いて現時幾多の實際社會問題に對しても亦一個の意見をあり能ふべきものなりと主張せしむる直接の因由である。

一

古來幾多の思想家乃至哲學者が主張したる所を現今吾等が解する意味に翻譯するの勞を惜まないならば、恐く如何なる思索家も價値につきて云爲せざるはなく、從つて何等かの意味に於て其の壞抱したる又はせる意見を一個の價値體系に組上ぐることは必ずしも難事ではあるまい。唯併し哲學上に於て價値なる概念が其の重要な位置を占め來りたるは比較的近時に屬するが爲に (1) 吾等が現今有せんと欲

する形に於て價値の體系を明に舒述したるものは未だ其の數決して多いとは云へない。のみならず價値を云爲する多くの認識論家の間に於ても、吾等が欲する如く凡ゆる社會生活の範圍に互りて其の當さに有すべしとする價値を認むるにつきては、幾多の異論もあるべきは容易に想像し得べき所である。今余は茲處に此等の學說史の全體に互りて、希臘の初めより現時幾多の社會改造論者に至るまでの凡てにつきて、價値學說の發展史を舒述せんと企つるものではない、而して又是余の能く任とする所ではない。只余の問題を考ふるにつきて余の思想の趨いた代表的學說丈は、之を茲に顧みるは研究者としての余の義務であり且余の問題成立の内面的理由を語るものでもあり得る。

(1) W. Windelband: *Lehrbuch der Geschichte der Philosophie*. 5. A. 1910 S. 354 ff.

世界の凡ゆる文化が一朝にして消え去るとも、吾等に Platon と Kant とが残さるゝならば、吾等は之によつて能く永久に人文の記録を再生せしめ得るであらう。凡ての思索は其の根據を洞察するに於て殆んど Platon に盡き、Kant によつて遺憾なきに庶幾からしめた。今價値に關して吾等が考へんとするものも畢竟其のイデアの世界につきて云爲するものであり、其の Sollen の境に入つて吾等を今圍繞する社會生

活の重要につき其の新しき而して至當なる解釋を求めんと欲するに過ぎない。問題はこの如くして常に古い只新しかるべきは解釋に過ぎない。PlatonがIdeen界の頂上に善を置きたる思想は正しき傳統を通じて Kantに至りて當爲(Gelien)となつた。只其の當爲に對する解釋を新にしたる現今の立場より眺められて Kantは其の價值界を論理的、美的、倫理的、宗教的(又は形而上學的)の四に分つものとせらるゝこと一般である。現時に於ても價值の種類を擧ぐるに於て殆んど凡ての學者が此の四を大綱とし僅に之に幾多の小さき結合乃至組合せを試みるを以て常態なりとする。Windelbandの哲學體系も全く之によつて組織せられ、(2) Münsterbergの價值哲學一卷も亦所詮此の外には出て居らぬ。(3) Eickertの試みたる價值體系論の一篇又其の趣旨は異なるとも全然此の趣きを脱したるものとは云ひ得ない。(4) 而して恐く是現時斯學の通説と云ひ得べきであらう。若し夫其の四價值間の Rangordnungに至つては Platonの善を享けて何れも宗教的形而上學的價值を以て其の頂點に在りとするとも凡ての論者を通じて全く揆を一にして居る。只異論の存するは宗教的價值以外の他の三價值につきて其の間の關係を如何に見るべきかに關するのみである。

(2) W. Windelband: Einführung in die Philosophie, 1914.

(3) Hugo Münsterberg; Philosophie der Werte. 1908.

“ ” ; The eternal values. 1909.

(4) H. Rickert; Vom System der Werte. (Lagges, IV, 3, 1913, S. 225, ff.)

此等の學說の中にあつて著しく注意すべき特色を發揮せるは哲學史上恐く唯一の Hegel あるを知り得るのみである。Hegel は Die Philosophie des geistes (6) に於て Platonologie des geistes (6) 並に Enzyklopädie 中の Die Logik (7) 及び Wissenschaft der Logik 中に Die subjektive Logik (8) に記述せられたる思想を開展して其の objektiver Geist より absoluter Geist に進展するの主張に到達し此くして價值哲學に對して一の甚だ深き意味を語るべき問題を提出した。近者 Mehlis (9) が其の著書に於て此の兩者の所謂 Geist を「價值」と翻譯して其の解釋に努めたのも蓋し所以あることである。余は今茲に幾多の思想家と共に Hegel の思想の全體に没入して所謂 „Lebendiges und Totes in Hegels Philosophie“ (10) を検討することを企てはしない。只古來並に現時の思索家によりて全く閑却せられたる問題の鮮明が現今の哲學思想の體系に於て又實際の社會問題に於て其の解釋に對して唯一の鎖鑰を與ふるものなることを悟らしむるにつれて Hegel の思想は甚だ意味深き暗示を提供するものなることを茲に明にしたいと思ふ。

- (5) Hegels Werke, 7. II 1845.
 (6) " " 2. 1832.
 (7) " " 6. 1840.
 (8) " " 5. 1834.

(9) Georg Mehlis; *Lehrbuch der Geschichtsphilosophie*, 1915.

(10) B. Croce の此の表題の下に記述を試みたる研究 (*Lebensweisheit und Totes in Hegels Philosophie*, Deutsch von H. Blicher, 1906) は閑却せられたる獨逸の偉大なる哲 Hegel を救ふものは伊太利なりとして自己を英國の *Stilling* に比するの自負に値するもの也

Hegel 哲學に於ける *absoluter Geist* の學説は余の茲に事々しく縷述するまでもな
 5。彼は These としての *subjektiver Geist* に對して *Anthese* としての *objektiver Geist* を
 思はしめ此の兩者を分別する制限は *Geist* が自由又は絶對となるに及むで消滅する
 の意味に於て (11) 其の兩者の *Synthese* として *absoluter Geist* を想定するに至つた。此の
 三者の *Geist* の各々内部に於て其の理念發展の經路を辿るに當つて彼の全哲學體系
 の *Nerv* なる *Dialektik* を以てすると *subjektiver Geist* に於ては *Die Anthropologie*, *Die Phi-*
lanthologie, *Die Psychologie* の三階段を以てし其の各々の内部に於て復た更に其自身
 多少の無理を敢てしても猶且三個の *Momente* を以て其の開展の跡を指示せんと欲
 した。第二段の *objektiver Geist* に於ても其自身の内に復た *Das Recht*, *Die Moralität*, *Die*
Sittlichkeit の *Dialektik* を追ふて進み其の三者復た各々前の場合の如くに其自身の内

部に三個の Momente を藏置せしめ、此くして遂に absoluter Geist に至つては Die Kunst, Die Religion, Die Philosophie の三段によつて其理念開展の道を表はし、其の各々の内部に復た三個の Momente を含むこと前階段の凡ての如くとし、終に其の究極に於て哲學即哲學史の思想に到達して Hegel 哲學の全體系は閉ぢられて居る。こは余が茲處に縷述するまでもなく、凡ての哲學々徒に知られたる Hegel 哲學體系開展の經路である。此の經路の基礎としての Dialektik の性質及び其の價値に關する考察は苟も Hegel 哲學を研究する如何なるものに對しても必ず觸れざるべからざる、必ず一度は通過せざるべからざるものであり Dialektik を如何に解するやは實に Hegel 哲學の全體を解釋するに對して最も重き役目を勤むべきものなること亦改めて茲に云ふまでもない。従つて Hegel 研究者にして此の論議に没入せざるものなく、其の Hegelianer なると Antihegelianer なるを問はず善き意味に於てなると惡しき意味に於てなるとを問はず言苟も之に及はざるものなきはなし。乍併余が今茲に問題としようと思ふ點は此等の諸論者に倣ふて直接 Dialektik 其のものにつきて何物かを求めんと欲するのではない。本論が特に文化價値の問題を中心としての論議なりとの意味に於て、Dialektik によりて開展せられたる彼の思想の内に少くとも subjekt-

freier Geist 丈は、只其の最後の階段に於て freier Geist を説くことによつて次の階段に入るの基礎をなすものなりとの意味を顧みる以外暫く之を度外に措くこととし、茲には主として objektiver Geist と absoluter Geist との關係につきて其の尋究の歩武を進め、此くして間接に Dialektik の意味を尋ねて見たいと思ふに過ぎない。

(11) J. E. Erdmann: Versuch einer wissenschaftlichen Darstellung der Geschichte der neuern Philosophie. III. 2. 1853.

S. 512 ff.

余は Hegel の objektiver Geist と absoluter Geist とに關する思想を顧みるに於て、未だ嘗て私に余が文化哲學の二つの根本問題なりとするものを明瞭に思ひ浮べざることなきを得ない。即ち本論に於て説明を試みんとする問題であるが、Hegel が哲學即哲學史を以て理念開展の頂點を形成するものなりとする所以に對しては Hegel の學説を稱するに Pantheismus を以てするの最も至當なりとせらるゝ點よりしても當さに首肯せらるべきであるが、抑々此の如く absoluter Geist を以て objektiver Geist の發展したるものとし、其の全體を包含し其の統一を思はしむとするの思想並に特に其の中の或る一の Geist 又は Welt に於て全體系の頂點を形成せしむる如き Hierarchie を想定することを吾等は當さに如何に考ふべきであるか。之が先づ第一の問題で

ある。余は茲に *Dialektik* に於て *aufzuhebende Momente* とせらるゝものは反對の概念なることを要し例へば善惡美醜眞偽の如き單純の抽象ならざる二個の具象的現實(例へば理念 *Idee* に對して其の *Momente* として Hegel が考へたる *Natur* と *Geist* の如きもの)なることを得ずとするの論點を明にすること Croce の如くになして個々の範圍に至りて其の論理的不可能を論證せんと欲し又は出來得れば其の駁論を考へんと欲するものではない。問題は Hegel ならずとも Kant でもよし又 Platon でもよし。Kant, Fichte の如く凡ての價値を論理化せんとするもの、Schelling の如く之を美化せんとするもの、Comte, Hegel の如く之を論理化せんとするもの、Schleiermacher の如く宗教化せんとするものに對して之を如何に解釋すべきかといふことである。Hegel の理性化を以て問題なりと思ふ者は牙が單純に理性化するの故を以てのみか、又は抑々其の諸價値中の何れか一を以て他の凡てに對して「優越」を示すべきものとする如き一定の *Wertordnung* を興ふると其自身が問題なりとは云ひ得ぬか。Platon, Comte の倫理化に對しても亦同様のことを考へ得ぬか。此の如き *Wertordnung* を興ふることによりて先づ第一に疑問となるべきは此の如き *Hierarchie* を形成する根據は抑々何れにありやと云ふことである。第二には此の如くして能く下位に置かれたる

價値の絶對性を毀損することなきを得るやと云ふことである。余は此の點に關して深き疑問を有するものである。

Hegel の *objektiver Geist* に表はれたる者は法律、道德、倫理、國家、歴史等に關するものであるが、之を超えて藝術、宗教、哲學の境地を認めたことに對しては更に考ふべき深き意味の問題が其處に横はることを非認し得まい。一方は法律、經濟、政治、技術は勿論道德に至るまで其の完成を未來に望まざるべからざる如く、謂はゞ時の流れ、進歩發展の歴史の裡に其の重要と意味とを委せざるべからざるは、他方藝術は云ふ迄もなく哲學に至るまで各々其自身に完了自足したる體系として、其の確立を歴史的發展の時の流の外に超然として要求し得るものとして、兩者の間に峻別する所ありたるは、確かに此等の凡てを總括して廣き意味に於て文化の所産と解し得るとしても、又自ら其の間に性質上截然區別する所あらざるべからざる所以を示したるものとして、確かに卓見と稱すべきである。希臘の彫刻と哲學、伊太利文復興期の繪畫、シェークスピアの戯曲、中世の神秘主義、獨逸古典期の文學、音樂、其の哲學の如き之を歴史の濤に、發展の流れに其の行末を委せたる蒸氣、電氣の技術、政治、經濟上の諸制度と比するときは、明かに其の間に何等かの差別を認めざるを以て寧ろ不當とさへ思はしむ

るものがある。若夫價値の表現より見ても既に美的文化は宗教的并に哲學的文化と并行提携し得べしとするも、道德的、倫理的、法律的文化とは背反對峙の關係を持續し來りたることは古來歴史上其の類例に乏しくないのみならず現今我が日本に於ても常にあまりに多く見聞し得る事象である。更に夫の藝術的、宗教的、哲學的天才につきて見るに、進歩發展の極致が永久の未來に横はり、其の努力の目標として只其の方向が此等の價値に與へらるゝに過ぎずとするならば、彼等は其の藝術的所産に於て、其の宗教的憧憬に於て、其の哲學的體系に於て永久に唯何等かの貢獻をなすのみにして、一個の自足完了したる境域に突入し得べしとするの信念に酬ひらるゝことなくして終らざるべからずとするは、恐くは、彼等の生命を奪ふにも等しいであらう。國家、經濟、技術、法律の文化は部分的に改變を許容しよう、其を以て進歩とも名づけ得よう。藝術、宗教、哲學の業に至つては部分的の改變は即ち全部の滅却を意味するものでなければならぬ。誰かプラトインのイデア論にマルクスの唯物史觀論を私かに混じ得よう。誰れかミケランゼロの羅馬宮殿の壁畫に雪舟の筆を加へ得よう。ベトト・ヴィエンのシンフォニイに清元を挿み得ようぞ。彼等の業は時の流れ人のどよめきを超えて其自ら圓滿完備の相を具するものとして其自身の深き意味を内

面より遊り出でし語り得べしとするの信念に活くるものに非ざるはなし。 Hegel が此の三者に特別の地位を與へたるは彼が深き洞察の賜たるは疑ふべくもない。

乍併此の如く兩者を區別することが首肯せられざるべからずとし、例へば法律殊に道德に對しても objektiver Geist の辨證論的開展の一要素たる位置を與へ得るに過ぎずとすれば、哲學、藝術等に比して全く性質の異なるものと見ざるべからざるに至るは當然であるが、併し果して其の間に些の考ふべき餘地なしと云ふべきであらうか。吾等は問はう。道德上の天才を思ひ得ざるか。更に法律上の天才を思ひ得ざるか。假令一人の天才に思ひ到り得ぬとしても此の如き天才を抱擁したる一時代を思ひ得ざるか。特殊科學として見たるユークリッド幾何學の如き幾千年の思想を支配したるものもあり、ローマ私法の如く儼として二十世紀の今日に至るまで社會生活の基調をなすものもあるではないか。反對に哲學に於ては進歩を許さず、部分的改變を容れずとするも吾等が有する數千年の哲學思想推移の跡は、只其の昔既に想ひ定められたる主義、組織の新しい領域に對する單純なる適用に過ぎずとするまで、後代幾多の思索家は殆んど比較に値せざる程無價値の考察に耽りつゝありたりと見るべきか。

此の如くして一方には Hegel に従ふて、同じく文化所産とは云ひながら多くの價値の間に截然たる區別を要すべき何物かの存在するを否み能はぬと同時に他方然らば Hegel の解する所に従つて其の主張する如き分別を認容して徹底的に其の解釋を究極まで推し進めんとすることは、未だ遽に卒然として其の凡てに互りて吾等の承認を贏ち得ざるものあることも恐くは否み得まいと思ふ。此くして茲にも解釋を要求すべき一大難問が横はつて居るのではないか。是余が第二問として茲に提出して見たいと思ふ點である。

二

思惟せられたる矛盾は既に打勝れたる矛盾なりと云ふと同じく、又藝術的鑑賞を以て満足し得ざる精神は既に藝術的精神に非ずして之を外にして他の範圍に於て將さに始まらんとする宗教的乃至哲學的精神なりとすると同じく、一の社會生活の範圍に於て其自身完了したる意味を見出し得ざるときは、其の時は既に他の範圍の社會生活の解釋が要求せらるゝ時である。此の如くして社會生活の凡ゆる範圍に互りての認識が求められ此の根據の上に凡ゆる範圍の認識が又可能ともなり得る

のである。而して此の如き多くの範圍に互りての認識は、相互に一以て他を其の完了したる意味の内に抱擁し得ざるに於て、又此の故に互に相互する所あるによつて相關的なりと稱すべきである。前の例を以て曰へば哲學的普遍を以て満足することを得ず、感官的直觀と人生の端的なる接觸とを思ふものは最早哲學的精神に非ずして特殊態の鑑賞に没入せんことを希求する藝術的精神である。其の間一を以て準備階段たるべしとする上下の關係は之を見得べくもない。若し此の意義に於ても猶一以て他の前階段にある基礎たりと云ふならば、反對に他以て一の前階段にある基礎たりとも云はねばならぬ。凡そ吾等が社會生活の様式として數へ得る學問藝術、道徳、宗教、儀禮、國家、政治、法律、經濟、技術等の各般の範圍に互りて之を觀るに、其の認識の起る因由并に其の根據は上述べた如く一の範圍に於て其自身完了したる自足の意味を悟り得ざる所に其の範圍の限界が畫せられ、其處に他の範圍の認識が可能となるべき根據が据えらるゝのである。其處に其自らの認識目的を具有する各種の文化價值が一以て他に對峙、併し并列し得る根據がある。一以て他に據る所あるは偶々其の各々が獨立に成立し得る根據である。茲に共通の基調を見得ると同様に差別の根據がある。乍併吾等の忘れてはならぬことは、此の如き差別の根據があ

り認識の可能がありとしても、一以て他に對して其の限界が据えらるゝ爲には、閑却せられたる全體に互りての基調たる分母の存在するといふことである。一の範圍が其自身に於て獨立の意味を有し、他の範圍は此の中に包擁せられず、後者は更に其自身完了したる意味を其の分たれたる範圍の内に立し得べしとするは皆共に此の基調の上に於てある、もし各特殊の範圍に於ける生活の認識論的根據をなし兼ねて其の目標となり、其の歸趣たり得るものを以て各種の範圍に於ける文化價值なりとすれば、此等の凡てを依つて以てあらしむべき全體に互りての閑却せられたる基調を把握せしむるものは所謂文化價值一般と稱すべきものである。所謂文化價值一般を悟ると云ふは此の基調を心中に把持することである。此の基調の上にあつて各特殊範圍に互りて認識論的に可能とならしめられたる社會生活の各様式は一以て他の意味を自足的ならしめず之を破毀せんとする點に於て、其々成立の根據と限界とを持つものである。

余の此の意見にして誤まりなしとすれば社會生活様式の全體に互りて一以て他の前階段にあるものとし之に上下の關係を見んとするか、又は唯其の一を抽出して凡ての他のものに對して頂點を形成せしむとすること、或は宗教的價值を以て或は

倫理的價值を以てせんとすること、從來殆んど凡ゆる哲學者の言ふ所の如くならしめんとするには、之に對して特別の論據が示されねばならぬ。上來の論述に従へば或る特定の範圍に於ける生活様式従つて其の價值を以て所謂全體の基調たらしめ或は善、或は自由、或は人格の如く一に主として倫理生活上の適用を思はしむべき概念を以て其の全體を覆はんとするは、云ふまでもなく此の基調に内容を與へんとするの意義に於て、却つて論者が常に力を極めて排撃せんとする心理主義に陥るものか、又は抑々諸價值の間に Hierarchie の存立を意識的にか又は無意識的にか認めんと欲するものに非ざるはない。之に對して充分に其の論據が示されねばならぬ。

余は今茲に各種の學說に互りて一々其の論據を內在的に檢覈しようとは思はなす。Platon の昔より Kant を經て現今の認識論家に至るまで、總じて先づ第一様式を以て第二様式に没入せしめ、第二様式を以て第三様式に没入せしめ、此くして一個の Hierarchie を形造り而して最後に唯其の中の一様式をとつて其の頂點に置くに至つたことは、之を根本に立ち入つて考へて見ると、皆是畢竟するに其の一若くは二若くは三以上の様式乃至價值を Hegel の用語例に従つて aufzulebende Momente として、其の上に其の總てを調和整正すべき一個の統一を思ふによつて然らしめたものであ

る。而して是正に或は(一)其の一 Moment の内に其の意味を自足完了せしめ得ざる或者あるに至り、之を他の Moment に移して完了せしめ得ると思ふが爲に茲に純然たる *Abstrahung* を想定するか(此の場合には後者の意味完了の爲に再び前者に復歸し得べき關係はあり得ない——此の事は特に注意を要する。)或は(二) *These* と全く相反對する *Antithese* とが相互に背反的排他的なるが爲に、之を打つて一丸とし、之を統一に導き、漸次 Hegel に見たる如く此の關係を繰返して *Hierarchie* を形成するものでなければならぬ。後者の場合に於て *Synthese* なるものは *These* にもあらず *Antithese* にもあらず只此等の二を其の内に包容して其の内に含む反對を調和したる統一なるが故に、之を究極に導くに於て其の如何なる形式を以て頂點を形成せしむるとして、其の様式又は價值が全體系中の一員なる以上其の *Dialektik* は到底常に其の過程の中道に止まるものと云はねばならぬ。而かも猶其の之をしも完了したる組織なりと考へしむる爲には、畢竟前の場合の如く一様式一價值に於て頂點を形成せしむべき *Abstrahung* の考へに歸一し得べきものであらう。其の開展階段の中途に於ける *Momente* が互に背反對時の關係にあることを要するものとして *Synthese* は此の反對を調和し統一するものなりとするの點より二の *Momente* と *Synthese* との關係を

如何に見るべきやは後に論ずることとして之を度外に措くとすれば所謂 *Dialektik* と *Abstraktion* の考へとは其の究極の頂點に於て其の體系中に列れる一員を置くといふ意味に於ては、飽くまで其の過程の中途に止まり謂はゞ心理主義に従ふものであつて、此の點に顧みて、兩者共に同一の立場より觀察せられべきことを示すものである。其の兩者の考察に於て途中の階段開展に於ける *Maßstab* の數が或は一若くは二なるとか、又は其の性質に於て差違ありとするは此の最後究極の觀點よりしては閉却し得べきものと云ふことが出来る。然らば問題は抑々此の如き *Abstraktion* の考へが正當の根據を發見し得べきかと云ふことである。

凡そ *Abstraktion* の考への適用せらるゝ場合は、或る一範圍の社會生活並に價値が其自身の自足完了したる意味を語り得ぬ場合に其の限界が畫され他の範圍に於ける社會生活並に價値を思はしむるを以て足れりとする事は出来ぬ。若し此の場合のみに止まらば上述べた如く其の各範圍の關係を相關的、並列的に見得べき可能もあり得べきものであるからである。*Abstraktion* が正當に根據を占め得る爲には其故に、例へば衣食足りて禮節を知ると主張するものゝ如く、一が他の成立條件として其の全部の意味を内在的に不可缺のものとする關係にあらねばならぬ。即ち社會生

活の様式乃至之に照應する價值が他の成立の條件として其の全部の意味に於て不可缺のものなりと解すること、恰もBなくしてAは考得るともAなくしてはBを考へ得べからざる如きものでなければならぬ。此の場合AはBよりも高き階段に立ち、一個の *Abstraktion* が成立し得と見るべきである。此の點を如何に見るべき。

余は根本に於て若し此の如き意味に於て *Humanität* が成立せるものなりとせらるゝならば、社會生活の各様式に於て従つて諸文化價值の各々に於て、其のヨリ下層に立つものは上層に立つものゝ中に全然没入せらるゝに至り、謂はゞ一個の手段として見らるゝことなくして能く其自身獨立の意味を如何にして保ち得るやを解するに苦しむ。例へば經濟行爲は常に其の全部的意味に於て倫理行爲の準備行爲又は *Höchstens* 其の一部のみなりとするならば、經濟行爲は何故に倫理行爲と分たれて而かも相關聯して其の獨立の意味を保ち得るやを解するに苦しむ。加之ヨリ低き階段にある生活乃至價值が次の階段にある生活乃至價值の全部的意味に於ける不可缺條件なりとするならば、高次の生活乃至價值は低次の其に比して亦全然獨立せる其自身固有の意義を有すること能はざるに至るべきである。例へば衣食足りて初めて知らるべき禮節が禮節の眞の意義を表はすものなりとすれば、衣食足ることを

離れて定め得べき禮節の獨立固有の意義は何處に在りやと云はねばならなくなる。凡ての社會生活を以て經濟生活の反影に過ぎずとするものは經濟生活を離れて政治生活、法律生活、學問生活其の他各般の物質的並に精神的生活を其自身固有の獨立なる意義を探り得べからずと見らるゝ所に其の深き缺陷が横はる。

此の如くして全體系中の一員を以て究極の頂點を占めしむる *Abstraktion* の考へは嚴正に正反合を以て進む *Dialektik* の考へに従ふものと然らざるものとを問はず、共に社會生活並に文化生活の各々につきて之を認むること難しと言はねばならぬ。

然らば *Dialektik* の考への基に遡つて二の背反對峙せる *Momente* と其の兩者の反對の調和統一を示すものとしての *Synthese* との關係を社會生活從つて文化價值に於て認むることを得ざるやと云ふ問題が残る。余は此の二 *Momente* と *Synthese* との關係が可能なる爲には、二の要素は全く相對峙、背反するものなるべくして、此の二の要素の内に既に此等と *Synthese* との間に見られ得可き様の *Abstraktion* の關係があつてはならぬと考へる。若し之に反して假りに *Dialektik* の二 *Momente* 間に既に *Abstraktion* の關係を見るも差岡なしと云ふならば、*Abstraktion* は自ら別論に屬するが (1) 併し今本論に於て關説する範圍に於ては若し二 *Momente* 間に既に *Abstraktion* の關係がありとすれば、

之より更に *Synthese* に對しても遞次的に *Abstufung* を考へ得べきが故に、余が前段述べた意義に於て社會生活及て文化價値の凡てに至りて *Abstufung* の關係を認めしめんとするものであつて上述べた如く余は之を否認せざるを得ない。之に反して *Dialektik* 本來の意義に於て二の *Momente* は互に相背反するの關係にあり、此反對を調和統一するものとして二 *Momente* と *Synthese* との間の關係を思ふときは、前の *Abstufung* の關係とは自ら別個の意味が存在することは明である、例へば *Sein, Nichtsein* と *Werden* との關係の如きである。此の如き關係が社會生活乃文化價値の間に認めらるべきか。

(1) Hegel の *Dialektik* に於て二 *Momente* 間に既に *Abstufung* の關係と見るべきもの多々あることは明かな事實である。

Hegel の *objektiver Geist* 中の三要素として掲げたるものの中 *Recht* と *Moralität* との關係は一應は此の意義に於ての *These* と *Antithese* との關係とも見得ざるにもあらざる様である。此くして社會的 *Legalität* と個人的 *Moralität* との反對は否定せられ且保持せられて *Synthese* となり *Sittlichkeit* となつたとも見得る。併し *Recht* と *Moralität* との關係は、恰も藝術と哲學との關係に於て藝術は哲學を排除せず併し哲學は其の

藝術的方面とも見らるべき言語等の手段なくして成立し得ずとする如き差別概念的の *Abstufung* が其の間に存する關係は、復た全く *das Reelle* と *die Moralität* との間にも見得る所なりとすること *Oogee* (2) の如きもある。惟ふに總じて社會生活の如何なる範圍、文化價値の如何なる種類を採り來るも、之を *These* 及び *Antithese* として背反對峙の關係に措定せんとすることは、恐く難事であらう。經濟と道德との背反は通俗の語義に於て *These* と *Antithese* との關係を思はしむるに近き者ありとしても、其の本來の意義に於て藝術と道德との差を思はしむるものと何れであらう。學問と法律との時々背馳と何の擇ぶ所があらう。Hegel の *Dialektik* は *These* と *Antithese* とが既に *Abstufung* の關係にあるものとして考へられたるが故に可能となりたれども、若し此の關係が嚴正に背反對峙のものたるを要すとしたならば如何ほどまで其の *Dialektik* が可能なりしなるべきやは、恐く疑問であらう。余は *These* と *Antithese* とが背反對峙の關係にあるにより初めて *Dialektik* は可能となるものと信ずるけれども、此の如き背反對峙の關係を二の社會生活及び二の文化價値の間に認むることは、恐く不可能であると思ふ。

(2) H. Gorce, in O. S., 3.

此の如くして前きに各價值間に遞次的 *Absolutum* を認むることを否認せらるべしとし、今復た其の中の或る特定の種類のものに對して *Dialektik* 本來の意義を適用して諸價值間の背反對峙を想定し、之に對して辯證論的の開展を想ふことも肯定せられざるべしとするならば、殘る所の可能は唯だ一つあるのみである。即ち諸價值間には此の如き關係の何物をも認むることなく凡ゆる考へ得べき而して認識論上可能なるべき社會生活の各範圍は、以上の説に反對して互に唯だ并列の關係にあるものとし、而して更に其の凡てを覆ふて上階段に位すべき價值を解して或は倫理的な活乃至價值多くの場合に於ては乍併宗教的生活乃至價值とするといふこと以外には從來通行の學説に於ては最早社會生活乃至文化價值の *Wertordnung* は可能とは云ひ得ない。然らば此の如く考ふることは如何あるべきか。

此の點に於て余は倫理的乃至宗教的生活又は價值の如き兎も角社會生活の様式、文化價值の一形式として考へられ得べき意義に於ては、假令諸生活様式乃至諸文化價值間の關係は并列の關係にあるものなりと見るとしても、之を以て其の總てを覆ふ所の上層にあるものと解するは、明かにカントが排したる意義に於て心理主義の誤まりに陥つたものであると思ふ。故にもし之に反して此等の頂點に置くべき

生活様式乃至價値は其の名稱は假令倫理的、宗教的價値の如く全體系中の一員を以てしても、此の場合に於ての此の生活様式乃至價値の意味其のものは他の生活様式又は價値と共に全體系中に并列せらるべきものに非ずとするならば、*开*は取りも直さず全體系中の一員として他のものと并列の關係に於て考へ得べき何ものを以てしてもならぬと云ふことを最も明に示して居るものである。人生生活の總てを包括せしめ或る意味に於て其の目標、其の理想、其の歸趣を示すものとしては知的生活を排すべしとの意味に於て、同じく人生の一面たる倫理生活を基調とする善の概念を以て、同じく人生の一面たる宗教生活に根張られる聖の概念を以てせんとしても、*开*は此等人生の一部又は一面的解釋を許し得べき意味を其自身に有するものに依つては、到底人生全般の歸趣目的は之を表はし得ないといふことを看取し得ぬものである。而かも生活様式乃至價値體系中の一を以てするに非ずんば抑 *Verforderung* は不可能なるを奈何せんやと云ふ *Dilemma* に立つものである。恰も思惟を排除する宗教家、哲學者が之を言ひ表はし而して甚だ稀ならず萬言を費すに思惟の形式を繕らざるべからざるに等しい。彼等は思惟を排却せざるべからずと思惟しつゝある。其自身によつて其自身の價値を判定せんとするの背理なるは共に其の揆を一

にして居る。積極消極の區別はありながら共に自己の眼を以て自己の眼を看んと欲するものに等しい。余は何故に此の矛盾を見得ぬかを怪しむものである。

三

以上余は消極的に文化生活の各範圍に互り従つて文化價値の各種につきて其の間如何なる意義に於てか Rangordnung を認めて之を一の Hierarchie としての Wertordnung に形成せしめんとすることは、到底其の論據を缺けるものなることを指示せんと欲した。余は今積極的に文化生活従つて文化價値の各々につきて其の關係を如何に見るべきやを明にして見たいと思ふ。

文化生活従つて文化價値の凡ゆる範圍に互りて其の間如何なる意義に於ても Wertordnung を見るべからずとするの思想は、勢ひ此等の凡てを同一平面に並行並列するものと見ざるべからざるは極めて明である。而して實に余は此等のものゝ間の相互の關係を上下の階層をなすものに非ずして並列の關係にあるものなりと見たいと思ふ。是甚だしく通説に反するものである。乍併余は一方何故に上下の階層をなすものとして見ざるべからざるかの根據を解する能はざると同時に他方上

下の階層をなすと見らるゝ一定の秩序は又看點の如何によつては全く正反對に、通説の上層となすものは下層とも見られ、其の下層と見らるゝものは却つて上層にあるものと見られ得るは、即ち其の兩者の間に區別せらるべき一定の限界と其の限界の根據との存在することは左りながら、單に兩者の間に相關的の關係が存するに止まることを示すに過ぎずと見るものである。換言すれば余は上來説述したる如く一方價値の順序を定むるの根據を認むる能はざると同時に他方通説に於て上下の階層をなすものと見るは實は並行的相關的のものに外ならざることを見誤まりたりとするものである。

如何なる意義に於ても *Workmanship* を見んとするものに首肯し得べき根據を缺くことは既に吾等は之を検したが、余は茲に進むで例示を以て上下の階層をなすと見らるゝものも實は並行相關の關係に在るものなることを明かにして見ようと思ふ。

Hierarchie の頂點にありとせらるゝ文化生活乃至文化價値が宗教的、倫理的、美的、論理的なりとせらるゝことは哲學史上凡て其々偉大なる代表者を有するものである。就中宗教的及び倫理的價値に其の *Workmanship* の頂點たる地位を與ふることが最も普通の見解である。

宗教的價値に他の三價値が倚屬すると論ずることは吾等と雖も容易に同情し得る所である。乍併他の三價値の何れとも同じく、自らを除きたる其の餘の三價値の各々を其の成立の倚屬的 *integrierende* の條件として有するものなりと論ずることは決して難事ではない。例へば倫理生活の畏敬すべき代表者に於て吾等は自由を思ひ、人格を尊び、道に遵ひ、仁を念とするに際し、其の間に能く宗教的憧憬敬虔の念なきを思ひ得るか。其の一個の偉大なる人格の完成に對して吾等は藝術的鑑賞の眼を向け得ざるか。其の倫理生活の遂行に於て明瞭なる理智の透徹を思はずして止み得るか。是即ち根柢に於て倫理價値に對する宗教的、美的、論理的價値の倚屬關係を示すものに非ざるはない。美的生活の驚異すべき完成者に於ても亦同様である。其の美的所産に對するや彼は恐く天賚永劫の相を此の中に認むるに宗教的信仰の念に打たれずしては止まざるべきであらう。自己の製作に膝まづいて懼伏したる夫の逸話は此の間の消息を傳ふるものにあらずとはしまし。其の深く内に懷抱する或ものを表現するに於て自由を思ひ人格を體化する倫理生活の面影を示さざるべきか。一線を畫すの筆、一撃を當つるの鑿、其の動くや内面的規則に従ふを思はしむるものあるに猶且能く其處に論理の開展を閑却するを得べきであらうか。論理

生活の感嘆に値すべき鴻儒の思索に於ても亦然り。彼は論理の峻嚴を前にして之を仰ぐに宗教的畏敬の想を以てせざるべきか。其の深き廣き思想體系の完成は吾等をして美的作品に對するの感を抱かしめざるべきか。仁者の心を以て心とするに非ずんば焉んぞ能く一學徒の口より、上にありては、星空内にあつては「道德律」と感嘆の聲を放つを聞き得べきぞ。

否、此等は價値の總てが其の一價値の完成に對して相互に倚屬的の關係にあることを最も明瞭に示すものである。即彼等は相互並列的に乍併密接に相關的なるを示すものに非ざるはない。何れの一をとるも尙ほ是同時に他の凡てを語るものである。而して是ぞ言ふまでもなく自己と共に他の凡てをして、依つて以てあらしむる基調の儼として存するを語るものである。

此の理は通常倫理的な生活の中に包含せしめられて考へらるゝ經濟、技術、政治、法律、道義、習慣、教育、軍事等の各社會生活様式及び其の論理的基礎たる各文化價値につきても同様に主張し得る所である。例へば經濟生活を以て狹義の倫理生活即ち道德生活の準備階段なりと説くものありとすれば、余は其の反對に道德生活を以て經濟生活完成に必要な準備階段にあるものなりと大なる困難なしに立證し得るであ

らう。人若し「凡ての重要な歴史上の出來事に對する究極の原因及決定的動力は之を社會經濟發展の中に見るを得べし」として凡ての法律的、政治的乃至精神的生活を以て經濟生活の反射なりと説くものあらば、余は亦容易に或る社會の經濟生活はその法律、政治的乃至精神的生活の反影に過ぎざることを明にし得るであらう。

余は此の如き意味に於て凡ゆる考へ得べき社會的、文化生活及び其の論理的基礎たる文化價值の上に何等の意義に於ても *Wertordnungs* を發見することを得ない。論者が立し得べしと信ずる上下の階段は、亦全く同じ生活様式及び價值につき、其の反對の階段を考ふることも同一理由により立證し得ることを示すは、即ち此等の諸様式及び諸價值の間に只相關倚屬の乍併相互に獨立せる關係の存在することを明瞭に示すのみである。

此の如くして余は凡ゆる社會生活の様式に互りて而して凡ゆる考へ得べき文化價值を通じて、其の間に一以て他の上段又は下段にあるべき様の *Abstimmung* は如何なる意味に於ても考へ得ない。其の一が其自身完了したる意味を明にし得と考へらるゝときは、既に其の他の範圍に於て明にせられ得られざるべき意味が其處に在り、唯其の自己の範圍内に於てのみ明にせられ得べき意味が可能なりといふことを示

すものである。此の意義に於ては個々の社會生活の様式及び價值は同一基調の上に相互に關聯倚屬しながら猶且其自身獨立の意味と地位とを有すべきことを示すものである。若し其の認識成果の體系を其の係はるべき範圍内に於て成立すべき學問なりと解すれば、其の學問の認職目的は當さに茲處に其の深き根基を求むべきである。此の意義に於て吾人の數へ得る學問、言語、文藝、造形美術、道德、宗教、儀禮、慣習、愛、國家、政治、法律、軍事、經濟、技術、教育等各般に互りての社會的、文化、生活及び其の論理的基礎たり、兼ねて其の目標たり、其の歸趣たる各般の文化價值は、皆其々に其の特有の意義を保持して同一基礎の上に相互に不即不離の關係に於て並列すべきものである。凡ての勞働は神聖なりとは此等の各々に於て其の價值實現に參與するに際して、其の根本に於て價值其のものに上下の階級なきの致すを以ての故のみである。凡て人は平等なりとは其の各々の人生を價值生活と觀ずるに於いて、其の價值實現に參與することの意義が平等なりと云ふのみである。實際の社會生活に於いて一商店の店員が小切手に署名するの經濟行爲を以て或る後に來るべき倫理行爲の準備階段なりとは考へ得べくもない。又彼の行爲が其の儘に即ち先天的に、一國帝王が其の詔書に署名すると *Verordnung* を異にすべしとは思ひ得ない。共に其々の行

爲が其々の範圍に於て價值實現の過程にあるものなりと見らるゝに於ては、余は其の間に Rangordnung を附し一を以て他の階段の下に在り又は其の上に在りとは解し得ない。此の故に余は諸文化價值の上に於て何等の意義に於ても Rangordnung を發見し得ない。余の所謂文化主義は一個特定の文化生活を偏重せんとするに對して反抗の聲を擧ぐるに於て其の消極的意義を語らんと欲するものである。(1)

(1) 黎明會講演集第一輯所載拙稿「文化主義の論理」參照

Hegel が *absoluter Geist* として *objektiver Geist* と分ちたる藝術、宗教、哲學に就ても開が又其々に文化價值なりと解釋せられ得る意味に於ては、余は法律、道德、國家、政治の諸文化價值と離れて又は其の上に特異の地位を興ふべき所以を見得ない。文化價值と解釋せらるゝ範圍に於ては凡ゆる價值は凡て相互に并列の關係にあると見るべきである。文化價值の全部に對立して他の種の價值を想ひ得べきことは余が後段本論に解明せんと欲する第二の問題に屬する。茲には唯凡ゆる文化價值と解せられ得る範圍の價值の間に於ては假令 *absoluter Geist* と稱せらるゝ藝術、宗教、哲學の價值に對しても *objektiver Geist* と稱せらるゝ國家、法律、政治、經濟、技術等の文化價值と相對して其の間何等の意義に於ても *Wertordnung* を認むること能はざるを明にし

たいと思ふ。

唯茲に一個の考ふべき問題としては、若し文化價值にして其全範圍に互りて相互に關聯倚屬且獨立なる地位を認めらるべしとしても其各自の限界を盡し依つて以て其の各々の可能を基礎附けし得べきものは、或る一個の遍通なる基調の上に於てでなければならず相互に分別せらるゝ所以は取りも直さず既に其の分別せらるゝによつて相結ばるべき基礎あることを示すと云ふことである。此の所謂基礎、基調なるものは、之を認識論的に見れば其の諸文化價值従つて之を通じて諸文化生活を論理的に可能ならしむる最も深き根基であり、之を形而上學的に見れば諸文化生活の係はるべき凡ゆる文化價值の意義を明かならしむる目標であり且歸趣である。文化價值一般とは即ち此の謂である。并列關係にある諸文化價值の全部の此の文化價值一般に對する關係は之を内容の側より見れば余が既に他の機會に於て論じたる如く(1)恰も *Sein* と *Sollen* との關係に於て後者が前者の極限概念として見られると同様の關係に立つものと思はれる。之を形式の上より見れば總括的的文化價值一般の諸文化價值に對するは恰も *Gattungsbegriff* の其の *Exemplar* に對する如く、*Hegel* の思想に従へば *Das konkrete Universale* と考へ得らるゝであらう。各種の分た

れたる文化價值は即ち其の特殊の形式に於ける文化價值一般なりと解すべきである。吾等の有する各般の文化生活を以て、各々其の係はるべき範圍内に於ける文化價值實現の過程なりと解し得べしとすれば、其の目標其の歸趣は各般の其々の範圍に於ける文化價值を通じての文化價值一般なりと見ざるべからざるの理は茲にある。余の所謂文化主義は各般の文化生活を價值實現の過程なりと見るに於て、各種の文化價值を其の特殊形式に於て表はしたる文化價值一般に係はらしめらるゝに於て其自身の最後の意味を探り得べしとし、此の如くして凡ゆる文化生活の範圍に亘りて一様に且一齊に、文化價值一般の内容的實現を希圖する謂はゞ形而上學的努力に於て其の積極的意味を語り得べしとするのである。此の如き圓滿具足なる社會生活の體様を稱して通説に見る如く宗教的生活となし又は倫理的な生活となすことを得ざるは明であらう。一社會生活の様式を以て全般を覆ふ能はざるは茲に至つて最も明白である。強ひて名づくべくんば文化主義を體驗實現したる社會生活とも稱すべきである。人生の意義は茲に盡き、歴史の意味は茲に終る。此の意義に於てドック勞働者の勞働は先天的に帝國宰相の勞務と上下の階級を附すべき價値實現の上に於ける意味の差別はあり得ない。余をして一の極言を許さしめば徳川

末期に於ける狹斜の文明は *roi soleil* の宮廷文化に比して未だ先天的に其の優劣を判ずべくもない。凡ゆる文明批評の根基は其の係はるべき諸文化價值而して之を通じて文化價值一般に對する關係、交渉、意味如何に在る。

(5) 極限概念としての文化價值(拙著經濟哲學の諸問題第三版第一九一頁以下)

此の如くして余は文化價值一般と各種文化價值との間には或る意味に於て一種の *Rangordnung* を認めざるを得なす。乍併此の意味に於ても猶ほ *Vertorfahrung* を云爲し得べしとするも、他と并列の關係にある或る一種の文化價值を以て其の *Hierarchie* の頂點を形成せしむとする如き心理主義の誤まりには陥つて居らぬ。又各種の諸文化價值の間に一貫したる *Abschufung* を見、其の頂點に文化價值一般を認めんとする如き普通の階段説に見る如き誤まりにも陥つては居らぬ。余は文化價值一般と諸文化價值との間の關係は既に述べた如く、寧ろ諸文化價值と其の各々の係はるべき範圍内に於ける文化生活との關係として見る *Sein* と *Sollen* との關係を茲に繰返すものゝ如く見て、文化價值一般を以て諸文化價值の極限概念なりと解して先驗的心理學的考察に従ふか、又は諸文化價值相互の關係は共に倚屬關聯しながら猶且獨立并行的なる不即不離の裡にありとし、而して此等諸文化價值の文化價值一般に對す

るは恰も其の *Exemplare* の *Gattungsheit* に向ふものに類すとして先驗的論理學的考察に従はんと欲するものである。

以上余は本論に於て解明を試みんと欲したる第一問に答へ得たと信ずる。(未完)

(八、九、二四)